

インディアン

自民党総務会副会長
名誉顧問 藤井基之



燦々と照らす太陽の下、ゆったりと動く馬の一群がありました。思いついたかのようには草をはみ、いたずらっぽく疾駆したりと、いかにも愉しそうです。東側の海からは常に心地良い風が吹き寄せてきます。

ここは海沿いの草原で、馬の群れは移動していきま。よくみると背に鞍を乗せている馬もいます。生まれたばかりの小さな仔馬たちもいます。

そう、スペインから大西洋を越えてパナマまで船で運ばれ、一五二〇年のテノチティトランの戦いの混乱の中で、コルテスの兵団から遁走したあの馬たちです。

馬たちは小さな群れを形成し、メキシコ湾に面した海沿いの草原を本能のおもむくままに北を目指してゆつくりと移動していきま。

そんな馬たちの前に、やがて見わたす限りの草原が目の前に現れました。

ここは北アメリカ中西部のプレーリーです。まさに馬たちの楽園ともいえる大平原に到達したのでした。平坦な固い地面は疾駆するのに最適でしたし、食べ物となる草には不自由しません。馬たちを

脅かす猛獣もいませんでした。馬の数はみるみる増え、群れは膨らみます。やがていくつもの群れに別れて、大草原のすみずみを生活の場としていきま。

この大草原に生じた変化に初めて気づいたのは、北米大陸の先住民、後にインディアンと呼ばれる人たちです。

今まで見たこともないような大きな動物の群れが突然現れたのですから、腰を抜かすほど驚いたことでしょう。しかし、馬は決して人に危害を加えません。すぐに優しい動物であることに気づき、心を通わせる間柄となりました。

やがて、友の背に跨がらせてもらいま。

おっかなびつくりでしたが、それはあまりにも素晴らしいことでした。馬の背に跨がると、視線が上がり、彼方まで見通すことができま。信じられないような速度で草原を駆けることができま。そして、生活圏が一気に広がっていきま。彼らの生活に馬は欠かせないものとな

り、単なる移動手段のみならず、狩りをしたり、部族間抗争をする際の機動力として使われるようになりま。

馬と遭遇することにより生活様式が一変し、彼らはほんのわずかの間に騎馬民族へと変貌を遂げたのでした。

馬の出現より少し遅れて、北アメリカ大陸にもう一つの変化が訪れました。

一六二〇年、大陸の東の端、現在のアメリカ合衆国マサチューセッツ州プリマスに、一隻の船が現れたのです。この船メイフラワー号には、イギリス人の植民者一〇二名が乗っていました。彼らの目的は、新大陸アメリカの開拓です。

しかし、冬への備えが十分でなかったこともあり、入植者たちは飢餓に苦しみ、あろうことかインディアン食料庫からトウモロコシを盗んでしまいま。

ここから、先住民と入植者との間の不幸の連鎖が始まることとなりま。新世界の住民であるインディアンと、旧世界から渡ってきた入植者たちは、トラブルやいさかいを起こしながらも、なんとか共存できる道を探っていきま。入植者

の人口が増えるにしたがって、次第に先住民側が圧迫されていくようになりま。

そして、北アメリカの東海岸は入植者たちの占拠するところとなり、幾たびもの、抗争を経て、先住民は西の方へ追い詰められていきま。

十八世紀の後半になると、入植者であるイギリス人の態度は横暴を極め、ついに民族浄化政策を打ち出しま。それまではまがりなりにも、先住民と入植者の関係であったものが、先住民と、侵略者の構図となり、インディアンの怒りは頂点に達しま。

そもそも、インディアンは部族ごとの単位で生活していたことから、他の部族と協調して行動することはほとんどありません。しかし、今回は、侵略者を駆逐するべく、五大湖周辺のすべての部族が一斉に蜂起しま。

こうして、一七六三年、ポントリアック戦争が起こりま。

インディアンの戦士たちは、イギリス軍の砦を次々に陥落させ、父祖の地を回復していきま。こうして侵略軍は、とうとうピット砦に追い込まれてしまいま。

インディアンに包囲されたイギリス軍は、ここで、恐ろしい作戦を実行しま。なんと、天然痘患者が使っていた毛布を贈り物としてインディアン側に届けたのです。

その結果、インディアン側に天然痘が大流行し、壊滅的な災厄をもたらすことになりま。ほぼすべてのインディアンが感染し、戦士やその家族の半数以上が命を落とすといわれています。恐ろしいまでの被害です。とても戦争どころではなくなりました。

なんとか、態勢を立て直した侵略軍は、かりそめの和平交渉を成立させ、危機を脱することに成功しま。

天然痘を兵器として使うこの手法は、侵略行為を有利に進めていくため、侵略者たちがその後も先住民に対してしばしば使ったといわれています。

一七八三年のパリ条約によりアメリカ合衆国の独立が認められま。それ以降は、イギリスに替わり、アメリカ合衆国が新たな侵略者となりました。先住民をさらに西へ西へと追い立て、一八九〇年には、とうとう先住民の土地のすべてを自分ものにしてしま。

さて、天然痘は常に人類に悪魔的な災厄をもたらしてきま。ついに人類はこれを克服しま。天然痘の根絶に成功したのです。これについては来月の話としまし。

藤井 基之

- 生年月日 昭和22年3月16日
- 選挙区 参議院比例区
- 当選回数 3回
- 出生地 岡山県岡山市
- 趣味 音楽・読書
- 個人ホームページ <http://www.mfujii.gr.jp/>
- その他 薬学博士・薬剤師
- 政治信条 私の政策の柱はA(エイジフリー)B(バリアフリー)D(ドラッグフリー：薬物乱用のない社会)社会創りです。高齢者も、障害を持つ方も、国民誰もが安心して暮らし、元気で生活を送ることのできる長寿健康社会を創るために何が必要か、を政治活動の根底においています。好きな言葉「昨日の夢は、今日の希望、そして明日の現実」
- 活動報告 参院議員厚生労働委員会理事等として、食品安全確保のための食品衛生法改正、健康増進法改正、薬事法改正、薬剤師法改正、クリーニング業法改正、国民年金法改正等に関与。
- 経歴
 - 昭和37年 岡山大学教育学部附属中学校卒業
 - 昭和40年 岡山県立岡山操山高等学校卒業
 - 昭和44年 東京大学薬学部薬学科卒業
 - 昭和44年 厚生省入省
 - 平成9年 厚生省退官
 - 平成9年 財団法人ヒューマンサイエンス振興財団 専務理事
 - 平成12年 日本薬剤師連盟 副会長
社団法人日本薬剤師会 常務理事
 - 平成13年 参議院議員(1期目)
 - 平成16年 厚生労働大臣政務官
(平成16年9月~平成17年11月)
 - 平成22年 参議院議員(2期目)
 - 平成23年 参議院政府開発援助等に関する特別委員会 委員長
 - 平成24年 自由民主党広報本部 副本部長
広報本部新聞 出版局長
 - 平成25年 自由民主党党紀委員会 委員
裁判官弾劾裁判所 裁判員
 - 平成26年 原子力問題特別委員会 委員長
文部科学副大臣
 - 平成27年 自民党政務調査会 副会長
参議院政策審議会 筆頭副会長
参議院厚生労働委員会 委員
 - 平成28年 参院沖縄及び北方問題に関する特別委員会 委員長
参議院厚生労働委員会 委員
国土審議会
離党振興対策分科会 特別委員
参議院議員(3期目)
自民党総務会 副会長